
望みと信念を胸に

白銀の戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望みと信念を胸に

【コード】

N3804W

【作者名】

白銀の戦士

【あらすじ】

ここは異世界『リールセムラン』
今この世界である異変が起こる。
そしてその異変に立ち向かう者達が存在する。
それぞれの望みや信念を持って・・・

世界観 & 主な人物紹介（前書き）

この話では登場人物の性格が原作とは多少違ってもいいかもしれません（特に億超えルーキーが）
それでもよろしければどうぞ。

世界観 & 主な人物紹介

世界観

世界の名は『リールセムラン』
様々な国があり、様々な種族が暮らしている。古代の遺跡が数多く存在する

国紹介

シーライン

ネル以外の『麦わら色の瞳』のメンバーの故郷。大小様々な国（島）が一つに集まった連邦国家。国同士の移動方法は主に船。悪魔の実の能力者が多数いる。
あまり他の国からの干渉は受けていない。

ジャイル国

万屋『銀ちゃん』と近藤達の故郷。十数年前までは鎖国してたが、強大な力を持つ異国民により開国した。数年前に革命が起こったが、失敗に終わり数多くの革命軍の者が命を落とした。

レンス国

タイキやバルモン達の故郷。人間、デジモン、獣人、エルフなどの様々な種族が暮らしている国。数年前からバグラ帝国に攻撃され、ある事情から、現在は人間とエルフが住む『陽部』と獣人とデジモンが住む『月部』に分けられている。

ガゼル王国

ネルの故郷。魔導が発達した国。

バグラ帝国

デジモンのみが暮らす帝国。数年前からレンス国の『月部』に攻撃している。

キムラスカ王国

ルークの故郷。ガゼル王国と同じ魔導が発達した国。スコアと呼ばれる預言に忠実。

マルクト帝国

キムラスカの隣国。こちらにも魔導が発達した国。

ヒノモト

政宗達の故郷の島国。数年前までは小国に分けられ戦乱が続いていたが、現在は数多くの国が同盟して、危うい均等を保っている。国民の中には『バサラ』と言われる力を持つ者が存在している。

登場人物紹介

モンキー・D・ルフィ

ギルド『麦わら色の瞳』のリーダー。伝説の宝『レイフレス』を見つけたのが夢。

ゴムゴムの実の能力者。仲間の事を大切に思っている。麦わら帽子は憧れの人物から預かった大切な物。義理の兄がいる。

ロロノア・ゾロ

ギルド『麦わら色の瞳』の一員。大剣豪になるのが夢。

三刀流の使い手。極度の方向音痴。

ルフィには借りがあるらしい。

ウソップ

ギルド『麦わら色の瞳』の一員。勇敢な戦士になるのが夢。

ルフィとは幼馴染。スゴ腕の狙撃手。

ニコ・ロビン

ギルド『麦わら色の瞳』の一員。ある古代文明の謎を解くのが夢。

その古代文明と『レイフレス』が関係している事からルフィと協力している。

遺跡などの先人達の思いを壊す者を許さない。ハナハナの実の能力者。

ネル（マクシミリアン・ネルガル）

ルフィ達が出会った謎の青年。魔導師。

左目を札で封じられ、魔術の力も制限されている。

後にギルド『麦わら色の瞳』に入る。かなり運が悪い。

ユースタス・キッド

ギルド『レッド・スカル』のリーダー。数々の問題を起こしてる。夢はルフィと同じ『レイフレス』を見つけること。その夢を馬鹿にした者には危害を加えていた。

同じ夢で気に入ったからかルフィは仲間以外で気を許せる存在。悪魔の実の能力者。

キラ

ギルド『レッド・スカル』の一員。短気なキッドの抑え役でもある。常にマスクを被っており素顔はキッドしか知らない。ドレークとは一度戦った事があるらしい。古代語は多少は読める。

トラファルガー・ロー

謎の医者。その腕はチョッパーと同じかそれ以上。キッドとは一度戦った事がある。様々な国を潜水艦で放浪している。悪魔の実の能力者。

ディエス
X・ドレーク

謎の男。元海軍少将。

ローレイ教団の大詠師派を酷く憎む。普段は傭兵や用心棒などをしてる。

悪魔の実の能力者。

バジル・ホーキンス

『魔術師』と呼ばれている呪術師。彼に頼めば呪った相手は必ず不幸になると言われている。

自分と他人の運命を占うことができ、人の死相が見えるその力が異端とされ迫害を受けていた。

悪魔の実の能力者。

スクラッチメン・アプー

ギルド『オンエアステージ』のリーダー。数々の楽器を奏でる事が出来る。

敵は怒らせて逃げるがモットー。キッドとは一度戦った事がある。悪魔の実の能力者

坂田銀時

万屋『銀ちゃん』のリーダー。死んだ魚のような目をしている。自分の信念を貫く。実は以前革命軍に入っていた。

志村新八

万屋『銀ちゃん』の一員。基本的にまともな人。自分が銀時達より弱いと思っている。実家は剣道場。

神楽

万屋『銀ちゃん』の一員。傭兵種族『夜兎』の娘。ルフィと同じ大食。兄がいる。

桂小太郎

元革命軍。銀時とは古い付き合い。
謎の生物エリザベスを連れている。

近藤勲

ジャイル国の騎士団の隊長。新八の姉お妙のストーカー。
多くの隊員に慕われている。剣もスゴ腕。

土方十四郎

近藤の隊の副隊長。銀時とは犬猿の仲。
近藤を信頼している。沖田とはかなり仲が悪い。

沖田総悟

近藤の隊の隊員。闇魔法と呪術が使える。
近藤を慕っている。土方の抹殺を企んでいる。

山崎退

近藤の隊の隊員。隠密術に優れている。
運が悪い。新八と仲が良い。

お妙

新八の実の姉。酒場で働いている。
近藤のストーカーキングが悩みの種。強い。

伊達政宗

ヒノモトの武人。小十郎と共に国の異変を探っている。
六爪流の使い手。料理が得意。
幸村とは宿命のライバル。

真田幸村

ヒノモトの武人。主君の命で佐助と共に国の異変を探っている。
熱血漢。主君武田信玄を心から尊敬している。
政宗とは宿命のライバル。

片倉小十郎

ヒノモトの武人。政宗と共に国の異変を探っている。
政宗に忠誠を誓っている。剣の腕は達人級。
キレると怖い。

猿飛佐助

ヒノモトの忍。幸村と共に国の異変を探っている。
苦勞人なため新八と気が合う。忍としての腕はスゴ腕。

長曾我部元親

ヒノモトの武人。国の異変を探っている。
仲間から信頼されている。ルフィと気が合う。
航海術も多少は出来る。

工藤タイキ

レンス国『月部』防衛団『コードラン』の隊の一つ『クロスハート』の隊長。

風魔法と特殊な力『デジクロス』が出来る。再び国が一つになる事を望んでいる

シャウトモン

クロスハートの一員、自称タイキの相棒。

月部の平和を望んでいる。デジモンと獣人を見捨てた『陽部』を恨んでいる。

バルモン

元『クロスハート』の一員。普段は無口で無表情。

ある人物を追っている。タイキは数少ない信頼できる人間。

ベルゼブモン

『クロスハート』の一員。バルモンの双子の兄。

とても強い戦士だったが、ある戦いで命を落としたと言われている。

メルヴァモン

『クロスハート』の一員。姉貴肌。

ベルゼブモンとは恋人同士だった。

ルーク・フォン・ファブレ

イオンの護衛をしている。『超振動』と言う力を持つ。
かつてある『過ち』を犯した。過去の彼を知っている人は過去のル
ークとはかなり違うらしい。

ティア・グランツ

ルークと共にイオンの護衛をしている。ルークの『過ち』を知っ
ている。

『譜歌』と呼ばれる特殊な歌を使える。以外に可愛いものが好き。

イオン

ローレライ教団の導師。キムラスカの国王に直接会うため旅をして
いる。

ルークとは友人同士。

世界観 & 主な人物紹介（後書き）

作者「どうも！作者の白銀の戦士です！」

銀時「ついに書きちまったな。大丈夫なのかクロスオーバー学園まだ終わってないだろ。」

作者「どっちもやってやるさ！」

銀時「そっぴいや登場人物でいなかった麦わらの一味や武将などは？」

作者「ちゃんとですよ！こんな作者ですがよろしくお願いします

！後クロスオーバー学園も読んでくださいね！」

銀時「何ちゃっかり宣伝してんだテメー！」

第一話 麦わら色の瞳

様々な種族が暮らす世界『リールセムラン』
この世界には数多くの国が存在する。

その国の一つジャイル国の東部に、アムレという小さな町がある。
アムレの後方には高い山があり、そこには悪名高い盗賊団のアジト
があるため、普通の人々は近寄る事さえも出来なかった。

「おっさんの娘を返せ！」

そんな盗賊団のアジトで麦わら帽子を被り顔に傷がついた少年が叫ぶ。その少年とその仲間らしき3人の男女は盗賊団に囲まれているが、気にもしていない。

「何を言っている？」

その少年の前には、盗賊団のボスらしき男が立ちはだかる。

「テメエら町長の娘を攫って、そいつを人質にして、町の奴らに騎士団に通報させる事なく金とか奪ってるんだろ？」

声を発したのは、麦わら帽子の少年ではなく、その隣にいる緑の髪で腰に3本の刀を差した青年だ。

「テメエら騎士には見えねえな。町長が傭兵を呼んだ様子はねえし。」

「俺達はギルドだ！」

麦わら帽子の少年が言う。その言葉に盗賊団のボスはニタリと笑う。

「はっ。ただのギルドかよ。町長もこんなガキ共に頼むなんざ血迷ったんだな。」

「お、俺達をなめるなよ！さつさと、ちょ、町長の娘を返さねえと痛い目を見るぞ！」

声を震わせながら言ったのは長鼻の少年だ。

「そうかよ。だが痛い目を見るのはテメエらの方だ。」

その直後

チユドオオン

どこからか銃声が聞こえ、銃弾が麦わら帽子の少年の胸に当たった。

「ハッ！対した事ねえな！オイお前から残りの奴らを片付けろ！」

盗賊団のボスの言葉に彼らを囲んでいた盗賊団が武器を構える。

その時

ギユウウン！ ドツ

麦わらの少年に当たった弾がはね返り、壁に当たった。

「なっ。」

盗賊団の誰もが動じた。

「きかねえよ。」

麦わら帽子の少年は笑いながら言った。胸には傷どころか血さえも出ていない。

「お前！一体！」

驚きながら、盗賊団のボスは聞く。

「俺はゴムゴムの実を食ったゴム人間だ。」

麦わら帽子の少年は言う。

「ゴムゴムの実？」

「まさか。悪魔の実か！」

「おいあれはただの噂じゃなかったのか!？」

盗賊団からはざわめきがあがる。

「騒ぐな！悪魔の実の能力者だろうと相手はたったの4人！やれ！」

盗賊団のボスの声で、盗賊団は再び武器を構え、襲い掛かる。

「さて、どうするルフィ？」

緑の髪の青年は麦わら帽子の少年、ルフィに聞く。それは質問ではなく合図だ。

「野郎共！行くぞ！」

「「「おう!!!(ええ)」「」」

ルフィ達も武器を構え攻撃する。

「ゴムゴムのピストル！」

ドゴツ

ルフィは後ろに腕を伸ばし戻る勢いにより、衝じる力で4、5人の盗賊を一度に倒し

「はああ！！！」

ズバツ

緑色の髪青年、ゾロは三刀流の構えで、盗賊団を倒し

「くらえ！火薬星！」

ドゴツ

長鼻の少年、ウソップはパチンコで盗賊団を倒し

「クラッチ！」

ゴキツ

黒髪の女性、ロビンは彼女の能力で、盗賊団の体に腕を生やし関節技で倒す。

わずか数分で彼らを囲んでいた盗賊団は全て倒された。

「ば、馬鹿な。」

「残るはお前だけだ。」

ルフィは盗賊団のボスに腕を突きつける。

「ハッ、確かにまともじゃかてねえな。そうまともじゃなきゃな！」

盗賊団のボスは一人の少女を腕で引き寄せ、首に剣を突きつける。

「アイツは」

それはルフィ達が見た写真に写ってあった町長の娘だ。

「このガキの命が惜しいよな？」

「きたねエぞ！」

ウソップが言うが盗賊団のボスは笑い飛ばす。

「何だつてするさ！さあどうする。」

「・・・」

ルフィ達は沈黙する。しかしロビンは腕を交差する。

「おい！妙な真似は」

そう言いかけた時

ニユル

盗賊団のボスの体に一本の腕が生え、次の瞬間

ゴキッ

「おおお！」

少女を押さえていた腕を曲げてはいけない所まで曲げ

少女を逃がした、

「し、しまった！」

腕を押さえながら、ふと前を見ると、ルフィが目の前に迫っていた。

「なっ。」

「ゴムゴムの〜ピストル！」

ドゴッ

ルフィは盗賊団のボスを後ろの壁まで吹っ飛ばした。

「大丈夫か？」

ルフィは笑顔で少女に聞く。

「うん！」

少女は満面の笑みを浮かべる。

「こいつらの事は町長に任せるか。」

「だな。俺達の依頼は町長の娘を取り返す事だし。」

ゾロとウソップが言う。

「お、お前ら一体。」

かろうじて意識は残っていた盗賊団のボスは聞く。

「聞きたいか？俺達はな」

ルフィは麦わら帽子を押さえながら言う。

「ギルド『麦わら色の瞳』だ！」

第一話 麦わら色の瞳（後書き）

作者「どうも、作者と」

銀時「銀さんです。ってかこの雰囲気クロスオーバー学園の後書きの雰囲気と似てるな。」

作者「それは言うな。」

銀時「っーか。俺の出番いつなんだよ。」

作者「もう少ししたら出るからな。では次回お楽しみに！」

第二話 ギルドと魔導師

アムルの町 町長の家

「娘を取り返してください。本当にありがとうございました。」

「ありがとうございます！お兄ちゃん達！」

「シシシッ。いって、飯をくれた礼だし。」

アムルの町の町長が、ルフィ達に礼を言う。ルフィ達は森に迷ってしまい、食料が尽きた時にアムルの町に着き、町長に食料をもらい、その礼として町長の娘を取り返す依頼を受けたのだ。

「それで、報酬ですが。」

「いって！お礼なんて。」

ウソップが断ろうとするが

「そうはいきませぬ。これを受け取ってください。」

そう言って、報酬として銀色で中央に黒い宝石がついた腕輪をもらった。

「何だ？これ？」

「何やら魔術が主流の国から届いた物らしいのです。」

「という事は、ガゼルかキムラスカ辺りね。」

とロビンが言う。

「でもいいのか？貰って」

「ええ。この町を盗賊から開放してくださいましたし。それくらいの礼はしませんと。」

「そうだわ。一つ質問があるのだけれど。」

ロビンが聞く。

「何ですか？」

「盗賊達がアジトにしていたあの山に古代遺跡があるって聞いたのだけれど。」

「ああ。山の中腹にあると。まさかそこに行くのですか？」

「ええ。」

すると、町長の顔が青くなる。

「やめておきなさい！あそこはあの盗賊達が行って逃げ帰った場所なのですよ！あなた方がいくら強くとも。」

「心配すんなよ。俺達強いし。」

「ああ。」

ルフィ達は自信満々に言う。

「大丈夫だよお父さん！お兄ちゃん達すっごく強いんだよ！」
娘にも言われ

「分かりました。そこまで言うなら地図を差し上げましょう。ですが無茶はなさるな。」

「おう！」

その翌日 ルーク達は宿に泊まり、町で準備をしてから遺跡へと向かう。

町長の話によれば、町から遺跡まで1日半はかかるらしい。

「おいロビン。その遺跡が例の古代遺跡なのか？」

夕暮れ時、山の中ゾロがロビンに聞く。

「さあ。私もそれが何の遺跡かまでは聞いたはいないわ。」

「おい。」

「まあいいじゃねえか。そこに『レイフレス』の手掛かりがあってもなくても。」

「それでいいのかよ。」

ウソップがつっこむ。

「でもただの遺跡じゃない事は確かね、その遺跡今まで最深部まで行った人はいないっと言われているし。」

「おい。大丈夫なのか？うっく々に危険な遺跡には行ってはいけない病が。」

そう会話していると

ドサッ

「えっ？」

突然ルフィ達の目の前に一人の男が倒れた。

「おい！大丈夫か？」

ルフィがその男に駆け寄る。青い服で黒いズボンを履いた黒い長髪の男だ。左目には包帯が巻かれてある。

「どうしたんだ？」

「狼かなんかに襲われたんだろう。」

ウソップとゾロが言う。ルフィ達も盗賊のアジトに行く時に戦ったからだ。服の所々が小さく破れている。

「う、うう。」

「おい！しっかりしろ！」

「み、……。」

「み？」

「水と……食料を。」

「助かりました。」

夜になり、ルフィ達は薪に火をつけ、野宿をすることにした。

「狼に襲われて、その後盗賊から逃げて、丸一日飲まず食わずで山をさまよっていたんです。」

「丸一日も、何も食わなかったのか！？」

「いや。そこかよ。にしても運が悪かったな。多分昨日俺達はその盗賊団を倒す前だしな」

ウソップはルフィにつっこんでから、男に言う

「はい。そうですね。そういえば、皆さんのお名前は？」

「俺はモンキー・D・ルフィ。よろしくな！」

「ロロノア・ゾロだ。」

「俺はウソップ。よろしくな。」

「ロビンよ。あなたは」

「俺は……。」

「？どうした？」

ウソップは言う。

「いえ！俺はネル。よろしく。」「ネルか。よろしくな！」
「はい。」

「それで、ネルはなぜこの山に来たの？」

「確かに、この山には盗賊がいたしな。普通は来ねえし。」
「ロビンとゾロが聞く。」

今頃あの山賊達は騎士に捕まり、牢屋行きだろう。

「来たというか、ここに来てしまったというか。」

「えっ？今何て」

ウソップが聞く。

「あっ！いえ。ちょっと迷ってしまっただけに、」

「お前迷子なのか。ゾロみたいだな。」

「誰がだ！」

ルフィの言葉にゾロが睨む。

「じゃあ。どっか行くところあったのか？」

ウソップが聞く。

「いえ、特には。」

「じゃあさ。朝になったら、俺達と一緒に遺跡に行こうぜ！」

突然のルフィの提案に

「えっ？遺跡？」

ネルは戸惑いを隠せないようだ。

「おいおい。」

「まあ。一人増えようが変わらねえしな。」

「そうね。」

「・・・分かりました。俺は行くところないですしね」

「よっし！」

ルフィの嬉しそうな笑顔にネルも微笑む、そして

（今行っても、役にたちそうにないし・・・どうか無事で、）

ネルは、大切なある人達の事を思う。

第二話 ギルドと魔導師（後書き）

銀時「そついや何で、ネルガル（ネル）は偽名を使つたんだ？」

作者「それは、後々分かってきます。」

銀時「そついや。お前つてネルガルの紹介で封じられた目が左目なのに右目と間違えたんだよな。」

作者「ギクッ。」

銀時「んなの。アレだ政宗の眼帯をしている方の目を右目なのに左目に間違えるような。」

作者「言つな！自分でも気にしてるんだ！それに書き直したよそこ！」

銀時「こんな作者ですがよろしくな。」

作者「また次回。」

第三話 遺跡に集いし者達

「着いたぞ！」

翌朝、ルファイ達は出発して、ついに遺跡に到着した。山の壁に掘られた石造りの入り口がある。

「大きいな。」

ネルは呟く。ロビンはすぐにその入り口に近づき、観察する。

「どうだ？ロビン。」

ウソップが聞く。

「ええ。この構造からして、あの古代文明の遺跡ね。」

「よし！入って見ようぜ！」

「気をつけるよ。何か仕掛けがあるかもしれねえしな。」

ルファイ達は遺跡に入った。

「何も起きないな。」

ウソップは持つてきたカンテラを持ちながら言う。遺跡は一本道だ。

唯一の明かりはカンテラだ。

「油断するなよ。」

ゾロが忠告したその時

キキッ

何かの大群がルファイ達の目の前に迫ってきた。

「ゴムゴムのピストル！」

ドゴッ

キィッ！

ルファイはその何かの一匹を打ち落とした。それは大きなコウモリの魔物だった。

「ここには、魔物もいるようね。」

「気をつけて行こう。」

ウソップがそう行った時

ガコツ ウソップの歩いていた場所の石の床の一部が下に下がる。
「危ない！」

ネルは何かを察したのか、ウソップを押し。

ビシユツ

ウソップの立っていた場所に数本の矢が右側の壁から来た。

「あ、あぶねえ〜。」

「気をつけて進もう。」

ルフィ達は再び歩き出す。

「そういえば、ルフィ。」

「何だ？」

ネルがルフィに聞く。先程まで多くの罨や魔物があつたが、問題なく進む

「ルフィ達は、何でこういう遺跡に行くの？」

「ああ。俺はな『レイフレス』を探してるんだ！」

「『レイフレス』ってあの伝説の宝？」

「そうだ！」

ネルも聞いた事がある。『レイフレス』は伝説の宝と呼ばれ、その正体は全くの謎。どこにあるのかも分からず、それを見つけたのはある海賊団を除いて誰もいないらしい。そのためか『レイフレス』の存在は多くの人にとってはただの作り話とされているらしい。

「俺は絶対に『レイフレス』を見つけてみせる。」

「じゃあ。ゾロさん達は？」

「俺は、大剣豪になるために」

「俺は、勇敢な戦士になるためだ！」

「私は、ある古代文明を追っているの、それが『レイフレス』に係していると思つて」

「皆それぞれ目的が違うんですね。」

「別に一緒じゃねえとダメって訳じゃないしな。」

そう話していると

ドゴツドゴツ

何かルファイ達に近づくと

「何だ？」

ルファイ達は構える。近づいて来たのは、灰色の石の体をした巨大な人形だ。三体はいる。

「これは、ゴーレム！」

「何で！？前に別の遺跡に行った時はこんないなかったよな！」

「恐らく、ここに遺跡を造った人達は、魔術を少し使っていたのかもね。」

「理由は後で考える。とにかく倒すぞ。」

「ああ！ゴムゴムのバズーカ！」

ドゴツ ゴーレムの一体は吹っ飛ばされるが、ゆっくりと起き上がり、再び近づく。所々に亀裂がはしっている。

「一筋縄じゃいかねえようだな！鬼斬り！」

ズバツ ゾロは、ルファイが吹っ飛ばしたゴーレムとは別のゴーレムの左腕は斬るが、まだ動く。

「火薬星！」

ドゴツ ゴーレムに当たって爆発するが、表面が焦げたくらいだ。

「私の技は通じなさそうね。」

「皆少し下がって。」

突然ネルがそう言う。見ると、ネルは何かの延唱を行っており、ネルの周りは光っている。

「ネル？」

ネルの延唱が終わると同時に、ゴォ

巨大な火の玉がゴーレムに直撃し、ゴーレムが倒れる。先にルファイが攻撃したのが合わさってか、ゴーレムは立ち上がらない。

「スツゲエ！」

「お前一体。」

「ルファイ！ウソツプ！油断するんじゃないやねえ！まだ残っている！虎狩

り！」

「ああ！ゴムゴムのガトリング！」

ズバツ ドゴツ ルフィとゾロの攻撃で残りの二体も倒れた。

「にしても、スゲエぞネル！何なんだあの火の玉！」

ルフィが目を輝かせてネルに聞く。

「いやたいした物じゃないよ。魔術だよ。」

「へえーあんな魔術って初めて見たぜ。」

「シーラインは魔術使える奴はいねえしな。」

「出身地はどこ？」

「ガゼル王国だよ。」

「ガゼル王国って、魔術が発達した国よね。」

ロビンが言う。

「あつ！だったらよ。これ何か分かるか？」

ルフィは町長にもらった腕輪を見せる。

「これ、『カイリアン・アイ』だね。」

「何だ？それ。」

ウソップが聞く。

「魔導具の一つで、嘘や未来や過去などを見通す事が出来るんだ。」

「へえー。だったらウソップの嘘がバレるな。」

「マジかよ！」

「でも、この力を発動するには魔導師が二人必要なんだ」

「ちえつ。」

ルフィはつまらなさそうだとすると

「んっ？」

ゾロが振り向く

「どうしたゾロ？」

ルフィが聞くが、すぐに何かが分かったようだ。

「何か物音が聞こえる。」

その時
ドゴツ

突然入り口の方から、あの大きなコウモリの魔物が一体吹っ飛んできた。

「な、何だ！？」

ウソップが驚きの声をあげる。すると魔物が吹っ飛んで来た方向から光が近づく

「んっ？何だ麦わからか。」

現れたのは、赤い髪で頭にゴーグルをつけ、赤いファーコートを素肌で羽織った男と、金色の長髪で顔をマスクで覆い、水玉模様のシヤツを着た男が現れた。

「キッド！キラー！」

「久しぶりだな。」

ルフィとゾロが言う。

「目的は言うまでもねえか。」

赤い髪の男、キッドが言う。

「ああ。って一緒に来てるのはお前だけか？」

「ああ。」

マスクの男、キラーは頷く。

「誰なんですか？あの人達。」

ネルはロビンに聞く。

「赤い髪の男が、ユースタス・キッド。マスクを被ってるのが、キラーよ。キッドはギルド『レッド・スカル』のリーダー。キラーはそのギルドの一員よ。」

「ギルドだったんですか。」

「んっ？見かけねえ奴がいるが誰だそいつ？」

キッドがネルを見る。

「ああ。昨日知り合ったネルって奴だ。」

「よろしく。」

「まあ別に、いいが。それより、この奥にあるんだよな、何かか」

キッドはどこか楽しそうだ。

「ああ。」

ルフィも楽しそうな顔だ。二つのギルドは一緒に遺跡の奥へと行く事にした。

その後も、手強い罫やゴーレムがいたが、ルフィ達は突破する。

「開けた場所に着きそうよ。」

キッド達と出会って十数分後、広場のような場所に着いた。たいまつがあつたので、ウソップはカンテラの火を使い、たいまつに火をつけて行く。

広場の壁のは、何かの壁画が書かれてある。

「これって。」

ルフィは広場を調べていく。

ふとネルは、他の壁と何かが違う壁の一部分を見つける。

「何だろこれ？」

ネルがその壁の一部分を触ると

ガコツ

「えっ？」

触れた壁の一部分が、突然中へと入った。

ゴゴゴ

「な、何だ！地震か!？」

突然広場が揺れる。すると広場の中央の壁画が、下へと下がる。そこには隠し部屋があつた。

「これは！」

隠し部屋の中には、何かの文字が書き込まれた大きな石版がある。

「やったなネル！」

「これが、ルフィ達が探していた？」

「ああ。これに『レイフレス』の手掛かりがあればいいが。」
キッドが言う。

(ひょっとして、この人も)

ネルはそう思ったが口には出さなかった。

「なあロビン！早く読んでくれ。」

「ええ分かったわ。」

ルフィ達が隠し部屋に入ろうとする。

しかし

「！！あぶねえルフィ！」

ガキン

何かが、ルフィ達に迫ったが、ゾロが刀でその何かとつば競り合いになる。

「ゾロ！」

ウソツプが叫ぶ。

ガキン

その何かは、少し後ろに下がる。

「何者だお前は。」

ゾロが言う。その者は、黒い二角帽子を被り黒いジャケットを素肌で着ており、両手には、サーベルとメイスを持っており、目元は黒いマスクで隠されており、顎には十字傷、胸には×の刺青をつけた男だ。

「お前は。」

キラーが思わず言う。

「知り合いか？キラー」

キッドが聞く。

「おいお前！急に襲い掛かって危ねえじゃねえか！」

ルフィが言う。

「・・・去れ。」

その男が口を開く。

「はあ？」

「その石版を読み解くな。それはお前達を知るべき事ではない。」

その言葉は静かだがどこか強い。何かの警告のようだ。

「なに言ってるやがるテメエ。」

キッドが今にも突つかかかって来そうだ。

「キッド。落ち着け。」

キラーが抑える。

「悪いが、そいつはきけねえな。」

ルフィが言う。

「ルフィ。」ネルは心配そうな目だ。

「どうあっても退かないか。」

「ああ。俺達をここから退こうとするなら。」

グッ ルフィは拳を握る。

「・・・そうか。」

チャキ

そう言つて男はサーベルとメイスを再び構える。

「お前ら。手を出すなよ。こいつは俺一人です分だ。」

「ああ。分かった。だが油断するなよルフィ。」

「テメエ何勝手に決めてやがる。」

「キッド。ここは麦わらに譲るぞ。」

「チッ。」

ルフィはそんなやり取りをした後、再び男を見る。今でもすぐに攻撃をしそうな雰囲気だ。

第三話 遺跡に集いし者達（後書き）

作者「次回はルフィとドレークの対決です！」

銀時「そついや、お前つて億超えルーキー好きだよな。やっぱあいつらが初登場した時からか？」

作者「いや、その時はあんまり関心はなかったよ。あつたとすればキッドとローぐらいかな。」

銀時「じゃあ何で興味持ったんだ？」

作者「実は二 動である動画を見て、んで興味を持って、それで億超えルーキーを調べてみたら」

銀時「はまっちまったって訳か。」

作者「そついう事だ。」

銀時「まああんま深く知りたくなかったがいいか」

作者「おいおい。ではっ！感想お待ちしてます！」

銀時「後、誤字・脱字あつたら教えてくれよ。」

第四話 遺跡での戦い（前書き）

作者「やっと更新できました！」

銀時「ったくおせえよ」

作者「しょうがないだろ！色々と忙しかったんだから！」

第四話 遺跡での戦い

「ゴムゴムのピストル！」

最初に攻撃したのはルフィだ。ルフィのパンチを男は右へ移動しかわす。

ダッ

男はルフィの懐まで素早く移動し、サーベルを振る。

「うおっ！」

ヒュン

ルフィが寸前で避けたため、サーベルは空を切っただけだった。ストツ

ルフィは一旦後ろに退き、再び男に向かって走り出す。

ヒュン スツ

二人共攻撃、避ける、退くを繰り返しながら戦っている。

「妙だな。」

ふとキッドが呟く。

「何がだ？」

ウソツプが聞く。

「アイツまるで全力を出してるようにはみえねえ。悪魔の実の力もあんまり使ってねえし。アイツならあんな奴すぐに倒せるはずだが」
確かにルフィの攻撃で悪魔の実の力を使ったのは最初に放った攻撃と数回ぐらいしかない。

「それはあの男も同じだ。アイツも全力を出している様には見えな
い。」

キラーはルフィと戦っている男について言う。

「何か全力を出さないというか出せねえって言う感じがするんだが。」

（それはやっぱ）

ゾロは一つ思い当たる事がある。そしてロビンもその理由が分かったようだ。そして

「あっ」

ウソップも気がついたようだ。

「くっ」

ルフィと男の距離は2、3メートル位離れている。いくら避けているとはいえ全ての攻撃を受けないという訳でもない。ルフィの腕にはとても小さな切り傷がいくつかある。それは男も同じ事、パンチをした時かすつたが、男の腕に当たったような感覚がいくつかあった。

ダッ

再び男がルフィに向かってくる。しかも先程よりも速い。

ヒュ

「うおっ。」

メイスが先に斬りかかったが、ルフィの髪をわずかに斬るだけだった。しかし男にはまだサーベルがある。

ズバッ

「くっ！」

ルフィの左腕に傷が出来る。

「ルフィ！」

ネルが叫ぶが

「おりやつ！」

ルフィは左腕に傷を受けた瞬間、右腕でパンチをする。パンチは男に直撃した。

ドガッ

「ぐっ」

わずかだが男に隙が出来た。男は後ろに退いたが

「ゴムゴムのバスターカ！」

ルフィはすぐに追撃をした。

「くっ！」

シヤキン

男はサーベルとメイスを交差させ防御する。

ドガッ

「ぐっ」

流石に防御しきれなかったのか、男はダメージを受けているようだ。

ザザザ

ルフィはまだ勢いを落とさず、男は押されるように後退する。

ガッ

男が壁画に当たる。

「はあっ！」

ルフィは突進しパンチを放つが

ヒュッ

寸での所で止める。

「何故攻撃をしない。」

男が問う。

「だって、このまま攻撃したらその壁壊れちまうだろ。」

それは当たり前だ。

「仲間と約束したんだ。出来るだけ、遺跡を壊さない」って」

それはロビンがギルドに入った時にした約束。

「だからあんま全力を出さなかったのか。」

「そうだな。」

キッドとキラーは呟く。ルフィが全力を出せば遺跡など簡単に壊れる。おそらくあの男も遺跡を壊さないために全力を出さなかったのだろう。しかし男の場合は遺跡が崩壊すれば生き埋めになるからつと言っ理由だが、

「一つ聞こう。」

男がルフィに向かって言う。

「お前は何のためにあれに書かれてある事を知りたい？」

あれとは、あの石版の事だろう。

「『レイフレス』の手掛かりがあるかもしれないからだ！」

ルフィは堂々と言う。男も少し驚いている様だ。無理も無いっとなルは思う。『レイフレス』は多くの者にとっては単なる作り話だと思われているからだ。

「・・・あると信じているのか？」

「ああ！だから探す。」

ルフィは笑みを浮かべて言う。

「・・・フツ。」

男も微笑する。

「テメエ。何笑ってやがる。」

キッドが突っかかるうとする。

「別にお前の夢を笑っている訳ではないさ。ただ答えがあまりにも意外だったからだ。」

もしかして、っとロビンは思う、この男もアレの存在を、

「もう、止めはしない。だがもしもこの石板に書かれている事が、お前達が望む事ではなかったら、決してそれを求めるな。」

「？」

ルフィは首を傾げる。理解していない者もいるが、ロビンは気がついていている様だ。

スツ

男は立ち去ろうとする。

「あつ！待てよ！」

ルフィが止める。

「何だ？」

「お前名前は何て言うんだ？」

少しの沈黙の後男が口を開く。

「デイエス・ドレーク。お前は？」

「俺はモンキー・D・ルフィ。」

「その名前覚えておくよ。ルフィ。」

スッ

男は、ドレークは去っていった。

「一体何者だったんだろうね。あのドレークって言う人
ネルが聞く。」

「さあな。でも悪い奴じゃなさそうだしな。」

ルフィが言う。

「あの男も去ったし、早速読んでみるわね。」

再びロビンは石版に近づき、解読しようとしている。

「ロビンさん。こんな難しいのを？」

「ああ。そういやテメエも読めるよな。」

ゾロがキラーに聞く。

「ああ。完全ではないがな。」

しばらくして

ロビンは石版の解読をし終えたようだ。

「どうだロビン？」

ルフィが聞く。ロビンは首を横に振る。

「『レイフレス』の手掛かりは無かったわ。」

「何だ。まあ別の所を探すまでだしな。」

「手掛かりねえならここに長居する理由はねえし。さっさと外に出
るぞ。」

ルフィ達は出口に向かって行く。

（あそこに書かれてあったのは、私達には必要なこと。）

ロビンは心の中でそう呟いた。石版に書かれてあったのは、ある『
兵器』についてだった。ドレークの不安が的中していたようだ。彼
は石版にその『兵器』について書かれているだろうと予想していた。
だから阻止しようとしたのだろう。

（それにしても、彼は一体・・・）

ロビンはそう考えながら出口へと向かった。

「じゃあな。麦わらこここまでだな。」

「ああ！また会おうな！」

遺跡から出て、ルフィはキッド達と別れた。

「そっぴやネル。お前かれからどうするんだ？」

ウソップが聞く。

「え、そうだな。」

ネルは考えこんでるようだ。

(陛下の元に帰らないといけないけど、今の俺じゃそれに陛下のあの言葉も……)

ネルはある人について考えていた。

「行くところないのか？」

「え、ええ。」

「じゃあよ。俺達と一緒に来ねえか？」

「えっ？」

ルフィの突然の提案にネルは驚きを隠せない。つまりギルドに入ると言う事なのだろうか。

「どうだ？皆？」

「つたくテメエは。だが別に構わねえよ。一人増えようが。」

「だな。俺も別に良い。」

「ええ。あなたはどうなのネル？」

ゾロ達も賛成のようだ。

「でも……」

ネルは考え込む

(今の俺は……でもルフィ達と一緒にいれば何か分かるかも知れない。……でもルフィ達に)

ネルは入るか入らないか悩んでいる。

「ネル？」

「迷惑じゃないのか？俺なんか入れて」

「んな事ねえよ。ネルの魔術すごかったし！」

「……分かった。一緒に行くよ。」

「よっしゃあああ！じゃあ宴しようぜ！ネル入った祝いに」

「おい。どこでだ。」

「じゃあ改めてよろしくだなネル。」

「よろしくね。」

「はい。」

ネルはにっこりと微笑んだ。

第四話 遺跡での戦い（後書き）

作者「次回はいよいよ銀さん達が登場します！」
銀時「皆！俺の活躍に注目してくれよな！」

第五話 万屋『銀ちゃん』(前書き)

作者「今回も遅れてしまって申し訳ありませんでした！」

第五話 万屋『銀ちゃん』

「それでこれからどうするんですか？」

ネルが皆に聞く。ルファイ達は山を降りた後、あまり人通りが少ない街道に出た。ここにはあまり魔物が出ないらしい。

「ジャイル国の首都、エドに行くわ。そこには用事があるしね。」
ロビンが答える。

「用事？」

「おうこれだ！」

ウソップは自分のバックから、赤い実を取り出す。「こいつはアオプって言う果物でこれを使って酒を作りたいたいからって試作品を作るために5個取ってこいってという依頼があっただ」

「そうだったんですか。」

「おっ！見えてきた！」

前を見ると大きな町が見える。首都のエドだ。ほとんどの建物は木造建築だが、中には立派な石造りの建物もある

ジャイル国はかつては鎖国状態で、限られた国と限られた貿易をしていた。しかし十数年前、ジャイル国に強大な力を持つ異国民により、鎖国が解禁され今では貿易が盛んな国となった。アムルの町も、異国民によって造られた町だ。石造りの建物は異国民や、国が変わる事に携わった権力のある者達の建物だ。

「じゃあ。酒場に行きましょうか。」

「ついでにさアイツらにも会おうぜ！」

「アイツら？」

ネルが聞く。

「エドにある何でも屋でそいつらとは顔見知りなんだ。」

「おもしれえ奴らだ！」

ウソップが答えた後ルファイが言う。

一方

工ドの町の一角かぶき町

「いいからさっさと家賃払えやこの天然パーマ！」

「うるせえな！ないもんはねえんだよババア！」

そのかぶき町のある建物の二階で二人の人物が口論になってる。

「はあ。またですか。」

それを階段から見ている眼鏡をかけた青年がいる。彼の名は志村新八。この建物の二階にある何でも屋『万屋銀ちゃん』で働いているのだ。そして今口論している天然パーマの男はその何でも屋『万屋銀ちゃん』のリーダー、坂田銀時で、もう一人の高齢の女性はこの建物の大家で、建物の一階にある居酒屋の店主、お登勢だ。

「ちよつと二人ともいい加減。」

新八が止めようとした時。

ブン

銀時が、お登勢に投げられた。

「ぎゃあああああ！！！！」

銀時は新八に当たり、新八は階段から転げ落ちてしまった。

一方

「はいよ、これだよな。」

「ここは酒場『すまいる』。ルフィ達は、以来の品を店主に渡している。」

「ありがとう。じゃあこれ、今回の以来の報酬だよ。」

店主は報酬の金が入った袋をルフィに渡す。

「ありがとな！」

ルフィ達は酒場を出た。

「酒場ってギルドの依頼とかも掲載されているんだぜ。」

ウソップはネルに聞く。

「へえ〜。ガゼルじゃギルドってあんまり見かけないから初めて聞いたよ。」

「まあ。あんまギルドを正式に認めていない国もあるしな。シーラインはギルドは無法者の集団ってイメージがあるし」
ゾロが呟く。

「まあ、キッドの所は案外問題起こしてるけど。」

「えっ？そうなのか？」

「ええ。依頼人に危害を加えたり、建物を破壊したりなどね」

ロビンが言う。

その時

「おっ！ルフィ久しぶりネ！」

ルフィ達に声をかけたのはチャイナ服を着た少女だ。

「よお神楽！久しぶりだな。」

「誰だ？」

「さっき言ってた何でも屋のメンバーだ。」

ゾロが答える。

「銀時や新八は元気か？」

「もちろんネ！会いに行くアルか？」

「お久しぶりですルフィさん。」

ルフィ達は万屋『銀ちゃん』へ行き、銀時と新八と再会した

「よお！つかお前なんかボロボロだぞ？」

「聞かないで下さい。」「でっお前ら、どうだ？ギルドの状況は？」

銀時が聞く。

「相変わらず、来る所は来るけど、来ない時は来ない。もう一回酒場に行って依頼を見てみるぜ。」

ウソップが言う。

「依頼が掲載されている酒場ってあんまりないですね。うちも相変わらずです。ルフィさんの所の方がマシですよ。」

「リーダーがちゃんぽらんだからネ。」

「それって何！？俺が悪いつて事か！マジでハート傷ついたわ！」

「落ち着いてください。まあそれは確かにそうですが。」

「お前もかこの地味眼鏡！」

「誰が地味眼鏡だ！一番気にしているんだぞ！」

「おいおい落ち着けよ。」

ウソップが止めに入る。

「何だか個性的な人達だね。」

「面白い奴らだろ？」

ネルとルフィが話す落ち着いた所で新八が聞く。

「それで、ルフィさん達はその後どうするんですか？」

「酒場で依頼を見たら、宿屋に行ってくる。でっちょっとこの町にいてから、シーラインに行くよ。久しぶりにアイツと会いたいし」

「あいつ？」

「俺達の知り合いの医者だ。」

ネルの質問にゾロが答える。

「そうですね。」

「じゃあ久しぶりに、別の国の話教えるネ！」

神楽は目を輝かせる。

「僕らってあんまり他所の国に行ったことないから。」

新八が説明する。

「いいぞ！」

ルフィ達は旅の話をした（ルフィの記憶がうる覚えだったり、ウソップの嘘が混ざったりしたが、そこはゾロとロビンが訂正した）後、酒場で依頼を見た後宿屋に着いた。

翌朝

「ルフィ達ってシーライン出身だよな。」

「ああ。良いところだぜ。」

「シーライン行きの船は、ここから南西にある港町ユーランよ。」

ルフィ達はユーランに向けて出発した。

その頃

「おはようございまっす！」

「うおっ！何すんだテメエ！」

自分に攻撃してきた茶髪の男に、向かって言う鋭い目つきの黒髪の男の名は土方十四郎。そしてその土方に攻撃をした茶髪の男の名は沖田総悟。

ここは、ジャイル国の騎士団の御所の前、ジャイル国の騎士団は、それぞれ隊に分かれており、土方はその中のある一つの隊の副隊長、沖田はその隊員だ。

「避けたかチツ。」

「おい！」

「よおトシ！総悟！おはよう！」

大きな声で二人に向かって言うのは、二人の所属する隊の隊長近藤勲だ。

「おはようございます。」

「おはようございます近藤さん。」

さっきまで、土方を殺そうとしていた沖田も挨拶する。ふと土方は、近藤が右手に何かを持っていることに気がつく。

「近藤さんそれは何ですか？」

「あっこれか？さっき他の隊の隊長から配られたのだが、他国の凶悪犯の指名手配書だ。」

「他国の凶悪犯の指名手配書がなんで配られたんですかい？」

総悟が聞く。

「何でも、この国に逃げてきているかもしれないらしくそれで配られたんだ。」

近藤は二人にその指名手配書を見せる。

「案外若いな。20代前半だな。」

「一体何したんですかいこの男？」

「お前達も知ってるはずだろう。数ヶ月程前、サシユ公国が壊滅したあの事件を。」

近藤の目が少し暗くなる。

「あの事件か。サシユ公国の城が吹き飛んで、首都は壊滅状態、大勢の人が死んだ。・・・まさかこいつが？」

「ああ。こいつはその事件を起こした犯人だ。」

「知ってますよ。確か暗黒魔導師って呼ばれてるんすよね。名前は聞いた事ありますが、こんな面だとはね。」

指名手配書には、『マクシミリアン・ネルガル』と書かれている。そして手配書にある写真に写っているのは・・・・・・・・ネルだ。

第五話 万屋『銀ちゃん』（後書き）

銀時「おい！何だよあの初登場のしかた！もっとカッコよくやれよ！」

作者「あれくらいが銀さんに丁度いい。」

銀時「んだとチクショー！」

作者「感想よろしくおねがいます。」

第六話 白き戦士と黒の男（前書き）

作者「今回は、オリキャラが登場します！」

第六話 白き戦士と黒の男

港町ユーラン

かつては漁業が盛んな町だったが鎖国が解放された事により、様々な国や島を行き来するのに使う船を出すようになった。ユーランに着いたルフィ達は、船が集まる場所に着いた。

「船がたくさんあるね。」

ネルは辺りを見回す。

するとルフィ達はある船が停まっている場所に向かう。

「あつ！ルフィ！」

少し遅れてネルが後を追う。

船の前にはオレンジ色の髪の女性が樽に座って本を読んでいた。

「おいナミ！」

ルフィがその女性、ナミに言う。

「ルフィ！ゾロ！ロビン！ウソップ！久しぶり！」

ナミはルフィ達に向かう。

「久しぶりだな！ひよつとしてこの船」

「そつシーライン行きの船よ。」

ルフィ達は楽しそうに会話をしている。

「あつ！そうだ。実は新しい仲間が出来たんだ！」

「ネルです。」

「私はナミ、フリーの航海士よ。よろしく。」

「ナミの航海士の腕はかなりのもんだぞ！すぐにシーラインに行けるし。」

ルフィが言う。

シーラインと他の国との間の海は荒れやすいのだ。さっきまで雲一つない青空でも、次の瞬間嵐になるなどよくあることだ。安全に行きたいのなら、かなり遠回りして、あまり荒れない海域に行くか、腕のいい航海士をつれて行くかどちらかだ。

「この船商船らしくてね、急ぎの交渉らしく私を雇ったの。あんたら5人くらい船に入れても問題はないでしょ。」

「助かったぜナミ！」

「ええ。だから」

ナミは手を出す。

「お一人様800ベリーね。」

ナミは笑顔で言う。

「ナミって金とかにうるさいんだよな。」

ウソップが呟く。

それから数時間後、シーラインの港町に着いた。ナミの腕は確かなもので、腕のいい航海士でも、予測が難しいと言われるサイクロンも乗りきれた。出発した時は、朝だったが、今は日暮れだ。

港町でナミと別れた後、ルフィ達はある場所へとむかった。港町より少し離れた場所で、周りにはあまり家がない所にぽつんと建っている一軒の家。家の前にある看板によればどうやら診療所のようだ。

「ルフィ達の知り合いの人って具合が悪いの？」

「いや。ここの医者だ。」

そう言うと、ルフィ達は裏口へと向かい

「おいチョッパー！」

「その声って。」

診療所の中から声が聞こえ、扉が開く。

「ルフィ！皆！久しぶりだな！」

「おう！」

ウソップが言う。ゾロ達も嬉しそうだが、ただ一人驚きを隠せない者がいる。ネルだ。

「おい。ルフィ」

「んっ？何だゾロ？」

「ネルは知らないだろ。」

「あつ」

「！！」

チヨッパーはネルの存在に気づき、慌てて扉に隠れるが、隠しきれ
ていない。

「それ、逆だよ。」

隠すのが逆なのだ。

ネルはそう言った後、チヨッパーを再度見た。ぬいぐるみのような
丸い体で手足はトナカイのような形で指は蹄。頭には角が生えピン
ク色の帽子を被っている。

「安心しろチヨッパー！ネルは俺達の仲間だ。」

ルフィが言う。

「そ、そうなのか？」

チヨッパーはネルに近づく。

「はじめまして。俺はネル。」

「チヨ、チヨッパーだ。」

まだ警戒しているようだ。一方ネルは

(可愛い)

と思っている。

「チヨッパーってお医者さんなんだよね。」

「そ、そうだけど？」

「すごいよ。」

ネルは笑顔でそう言う。

「ほ、ほめられたって嬉しくねえぞコンニャロが！」

乱暴な口調とは裏腹に、顔は嬉しそうで体はくねっている。

「感情を隠せないのよこの子は。」

ロビンが言う。すると

ガチャ

「どうしたチヨッパー。」

奥にある扉から一人の男が出てきた。肌は青く髪は金色で頭は青い
ターバンを巻き、目は赤く右目は髪で隠れており、様々な札が貼っ

てある白いマントをつけ白いズボンをはき、右腕は巨大な銃だ。背はゾロより高い。

「あっ！駄目だろまだ完治してねえんだから！」

チョッパーはその男に駆け寄る。

「誰だそいつ？」

ルフィが聞く。

「今、俺の診療所で治療をしているんだ。アイツらは俺の知り合いだ。」

「そうか。」

「俺はモンキー・D・ルフィよろしくな！っでお前は？」

「バアルモン。」

無口な男だ。

ルフィ達は診療所の中に入った。この家には診療所でもあり、チョッパーが住んでいるのだ。ルフィ達は先程バアルモンが出てきた部屋に行く。どうやら数日位入院する者達の部屋でベッドが五つある。

「チョッパーは俺やロビンと同じ悪魔の実の能力者なんだ。」

ルフィがチョッパーについて説明する。

「ヒトヒトの実っていう、食べたなら人間に変身できるやつを食ったんだ。」

チョッパーが言う。

「じゃあ人間トナカイだね。それにしても悪魔の実って本当に色々あるんだね。」

「そっぴや、シーライン出身以外で悪魔の実の能力者って聞いた事ないな。」

「盗賊達も、悪魔の実のことを伝説って思っていたしな。」

ウソップとゾロが言う。

「所でさ。」

チョッパーがネルに聞く。

「何で、撫でてるんだ？」

ネルはチョッパの頭を撫でてたのだ。

「あつ！ごめん！いつの間にか撫でてた。」

ネルは手を引つ込める。ネルは可愛い物が好きなので、つい撫でてしまったのだ。

「。。。。。」

一方バルモンは自分とは関係無しと思っているのか、会話に参加せず、少し離れた場所にいる。

「そっいや。チョッパ。あいついつからいるんだ？」

ウソップが聞く。

「三日前だ。薬草採りに行った時に浜辺で倒れていたんだ。でもあんまり自分の事話してくれないんだ。旅をしている事しか話してくれないし。」

「。。。。。」

まだ黙ってたままだ。

「あら。もう日が暮れていたのね。」

ロビンの言う通り、日はすでに沈んでいた。その時

トントン

裏口から扉を叩く音が聞こえる。

「患者か？」

「でも、それだったら診療所の方の扉から来るんだけど。」

「俺が、行って来る。」

ウソップが扉を開けようとする。

「一体なんのよう。。。。。」

ゴッ

「なっ！」

ドサッ

突然ウソップが、吹き飛ばされ、背中から床に倒れる。ウソップは気を失っている。

「ウソップ！」

ルフィ達が、ウソップに駆け寄る。開かれたドアからは

「何だアイツじゃないのか。」

白い髪で、黒いフードを着て、黒色の靴を履いた、青い目の男がいた。

「お前！ウソップに何をした！」

「ふーん。6人いや、5人に一匹かな。アイツここにいるって情報あるんだけど。」

「おい！聞いているのか！」

ルフィが言う。

「何だようるさいな。そんな奴どうでもいいだろ。見たところ弱そうだし。」

「どうでもいいだと！ふざけんな！」

ルフィはその男に殴りかかる。

ヒュン

男は寸でで避ける。

「全く、魔術が使えない国の奴は乱暴者だな。だから来たくなかったのに。」

「お前は！」

奥の部屋からバルモンが出てくる。

「おつ。発見やっぱり生きてたんだ。」

男はにんまりと笑う。

「バルモン知ってるのか！？」

ルフィが聞く。

「少しな。」

「じゃあ、早速。」

バツ

男がバルモンに近づく。

「くっ！」

バルモンは左手に持った赤い打振鞭で防御し、男を外へ吹き飛ば

す。

「中々やるね。」

「お前は確か俺に攻撃をした男と一緒にいた。」

「そつ、名前はクラントだよ。」

「おい待て！こいつの相手は俺だ！」

ルフィも外へ飛び出す。

「全くしつこい奴。君みたいな奴に興味なんてないんだよ。もう動かないでくれるかな。」

コオオオオ

クラントの周囲に黒い光が現れる。

「何をやってんだ！」

「させるか。」

ルフィとバアルモンがいつきに来るが

グアッ！

ゴッ

「ぐっ！」

黒い毛の巨大な熊のような魔物に阻まれる。

「どけよ！ゴムゴムのガトリング！」

「ギルティッシュュ！」

ルフィは目にも止まらぬ速さの連続パンチで、バアルモンは札で攻撃して倒したが

「黒き束縛よ、我に仇なす者を封じよ。ブラックチェイン！」
ズッ

「なっ！」

「あの時と・・・同じ。」

ルフィ達は地面から出てきた黒い鎖で足を縛られた。

「これが君達との差だよ。さてと」

そう言つて、クレインはバアルモンに近づき、右手を置き何かの呪文を唱える。

ドッ

「ぐっ」

ドサッ

鎖は消えて、バルモンは倒れる。

「バルモン！」

ルフィはバルモンに駆け寄る。

「それは魔術でも解けないし、あれの材料は、キムラスカやマルクトぐらいしか生えてない。ここからキムラスカがマルクトだと一週間はかかるからもう間に合わないし、君はここまでだよ。」

クレインは意地悪そうな笑顔で言った。

「お前！」

「全くうるさいな。君もむかつくからやりたいけど、もう疲れたし、君達の相手はこいつらでいいでしょ。」

そう言った瞬間どこからか。魔物が現れた。

「何だ。こりゃ。」

「今のは召喚魔術だよ！でも魔物をどうやって、ネルはかなり驚いている。」

「じゃあね。」

そう言っただけクレインはどこかへ行こうとする。

「あっ！待て！」

ルフィは追いかけてようとするが、魔物に道を阻まれる。クレインの姿はもう見えない。

「今はこいつらを先に片付けるぞ！」

「あ、ああ。」

ゾロの言葉でルフィは魔物に立ち向かう。

第六話 白き戦士と黒の男（後書き）

銀時「なあ。あのクレインとか言う奴。魔術がどうとか言ってたが
あそこまで見下すってどういう事だ？」
作者「その理由は、次回わかりませう。さて、ウソップとバアルモン
はどうなるのか！次回もお楽しみに！」

第七話 魔術師

「ゴムゴムのバズーカ！」

「鬼斬り！」

「セインフルール。」

「氷の銃弾よ我に仇なす者を凍てつかせよ！フリーズライフル！」

「ヘビーゴング！」

クラインが残っていた魔物達を、ルフィは拳で、ゾロは刀で、ロビンは能力で、ネルは氷で出来た銃弾で、チョッパーは人型に変化して倒していく

「ふう。これで終わったか？」

ルフィが辺りを見渡そうとすると、

ブンツ

闇に紛れて隠れていた、黒いボロボロの服を着た黒い魔物が、黒い鎌でルフィを斬ろうとする。

「はっ！」

「ルフィ！」

鎌が、ルフィに向かって振り下げられる瞬間

「はあっ！」

ズバツ

何者かが、二つの武器で魔物を倒した。

「大丈夫か？・・・お前は！」

「お前ってあの時の！」

それは、遺跡で出会ったドレークだ。

魔物は、ドレークが倒したあの魔物が最後だったらしい。

「それにしても、人が魔物を操るなんて、とても容易な事ではないのだけれど。」

「おそらく、これを使って無理やり自分に従わせるようにしたので

しょう。魔物の背中についてありました。」

ネルは、四角い黒い機械を見せる。

「それより。ウソップとバアルモンだ！」

「ああ。そうだな。」

ルフィとゾロは言う。

「おい。一体何があったんだ？・・・つて。」

ついさつき来たばかりで状況が飲み込めていないドレークだが、チヨッパを見る。

「な、何だ？」

「た、狸？」「俺はトナカイだ！」

ウソップとバアルモンを中に入れる。

「つてか。何でお前があんなところに？」

ゾロがドレークに質問する。

「用事があったな。お前達には関係ない事だ。」

一方、チヨッパはじつとウソップとバアルモンを診察している。

「一体どうなっただんだ？」

ルフィが聞く。

「おそらく、アイツが二人の胸に自分の手を置いた時何かをしたんだと思う。これが何か関係しているかも。」

チヨッパはバアルモンの胸に刻まれた、黒い線で出来た円の内側に何かの模様が入った物を見せる。

「これって・・・呪術！」

ネルが気づく。

「知ってるのかネル！」

「うん。俺も一度だけ呪術師のお婆さんと出会った事があるんだけど、相手に直接刻まれる呪術は、こういう風に円と円の内側に模様がつくって言った！」

「ネルお前何とかならないのか？前に俺の怪我を治してくれたじゃないか！」

ルフィは、ドレークと戦った後ネルに治療された時のことを言っている。

「直接刻まれる呪術は、普通の魔術じゃ無理だ。特殊な魔術じゃなきゃ・・・でも今の俺は」

（力を制限されてなければ）

「チヨツパー！薬で」

「無理だ。呪術に効く薬は存在するけど、その薬草はキムラスカやマルクトぐらいしか、シーラインには生えてないし、それに採りにいって薬が完成するまで二人の体力が持つか。」

「ちくしょおお！」

ルフィは床を叩く。

（俺は、仲間が苦しんでいるのに何も出来ないのか！）

ウソップとは、幼馴染なのだ。村は違うが時々一緒に遊んだり、それぞれの夢を語ったりとかしていた。そんな幼馴染が危機な時に自分が何も出来ない事を悔やむルフィ、そして仲間達

「いや。助かる方法はあるかもしれない。」

ふいに、そういったのは、今まで黙って話を聞いていたドレークだ。

「何だと？」

ドレークは静かに言う。

「効いた事がある。呪術師は新しい呪術を覚えた時は、万が一自分に跳ね返った時対処できるように、その呪術を解除する術も覚えるという。」

あっ、っと声をあげたのはネルだ。

「そういえば、そのお婆さんもそう言ってた！」

「じゃあ。呪術師を見つければ！」

「ひよつとしたら、解除する術を知っているかもしれないな。」
ルフィ達は一つの可能性を、見つけ出した。

「だが、どうやって見つけるんだ？呪術師なんて、あんまりいないしな。」

ゾロはそう指摘する。

「沖田だ！沖田って呪術使えるだろ！」

「沖田？」

「ジャイル国の騎士よ。ジャイルでは珍しい魔術を使えて、呪術も使えるの」

「だがナミの話じゃ明日の国境の海はかなり荒れるらしいし、明日は国境の海は、航海出来ない」と

「次に、行けるようになるまで、二人は持つかしら。」

また、新たな問題が発生した。呪術師は少数で、ほとんどが隠れて暮らしているのだ。呪術師を見つけるまで、二人の体力が持つかどうか。

「心当たりがある。」

ドレークは言う。

「この島から船で二時間くらいかかる島にレミス山という山がある。そこに『魔術師』と言う異名を持つ呪術師がいるらしい。そいつの呪術の腕はかなりのものだ。もしかすると」

「二人を助けることが出来るんだな！」

ルフィは喜んでいる。

「でも、あなた。何故そこまで私達に？」

ロビンが聞く。

「遺跡の時の襲った事の詫び、かな。」

そして翌日の早朝。ルフィ達は『魔術師』がいるという島へ向かうため、近くの港町に着いた。

そこには、一隻の船がある。羊の頭が船首のキャラベルだ。

「これが、ルフィさん達の船？」

「ああ！ゴイング・メリー号。俺達のもう一人の仲間だ！」

ギルドなどの島を多く行き来したり、国境を越える者達は連絡船ではなく、個人的に船を持つのだ。ただしルフィ達は、国境を越える程の航海術を使える者はいないため、メリー号はこの港に置いていたのだ。ロビンが多少航海術の腕があるので、動かせる。

ルフィ達は船に乗り込み出航する。

「頑張れよ。絶対に助けるからな。」

ルフィは、意識がない二人に声をかける。チョッパーはその横で二人を診察する。

「おかしい。バルモンの方が呪いの進行が早い。」

「そうなのか？」

「うん。一体どうして……。」

ルフィ達は一度、甲板に戻る。

「にしても、その『魔術師』ってのは一体どんな奴なんだ？」

ゾロが言う。いくらその山に登った所でどういう風な者か分からないければ意味がない。

「俺も、噂ぐらいでしか聞いたことがないのでな。会った者もほとんどそいつの顔を見ていないとか、後、あまり口を開かないから、男なのか女なのか、若いのか、老いているのかも分からない。特徴と言えば『魔術師』はいつも白いフードを被ってる、後腰に剣を差しているとか。」

「それにしても、『魔術師』か。」
ネルが言う

「魔術を扱える人がいない。シーラインにとって、その人の呪術は魔術みたいだと思って言われているでしょう。」

「そういえば、あのクレインって言う奴、『魔術を使えない所は乱暴者だ』とか何だか見下すような事言ってたよな。」

「失敬だなそいつ！」

「聞いた事がある。ガゼル王国やキムラスカ王国やマルクト帝国のような、魔術が発達している国の魔導師は、魔術を扱える人が極端に少ない、ジャイル国や、魔術を扱える人がいないシーラインや、ヒノモトを見下す人がいるとか。もちろん王はそれを許してはいないけれど。」

「別に魔術が無くたって俺達には構わない事だけだな。」
ルフィが言う。

それから二時間後、ルフィ達は島に着いた。

「さて、と。じゃあそのレミス山に向かうか！」
ルフィが言う。

「ウソップは俺が背負うよ。」

チョッパーは本来の姿の、トナカイとなり、ウソップを背負う。バルモンはゾロが背負うようだ。

「じゃあ早速。」

「あんたら、あの山に行くつもりかい？」

一人の男が話しかけて来た。

「ああまじゅつブホッ！」

ゾロに頭を叩かれる。

「あんまこっちの目的を言うんじゃないよ。」

「知り合いが少し具合が悪くて、レミス山には薬草が生えていると聞いたので採りに来たのよ。それでレミス山がどこにあるか教えて欲しいのだけれど。」

船の中でドレークは、レミス山には数多くの毒草や薬草があると聞いたので、ロビンはその情報を元にして言った。

「ああ。それならこの町を北に言った所に、霧の深い山があるそれが、レミス山だ。」

「そう、ありがとう。」

「あんたらは、知らないかも知れないが、あまり山の深い所まで行

かない方がいい。あの山には『魔術師』がいるからな。」

「そんなにヤバイ奴なのか？」

ルフィが聞く。

「もちろんだ。『魔術師』に頼めば、誰でも呪える。ある金持ちの男は、財産も家も失われ、ある貴族は地位を失墜、ある者は落石で重傷となるなど、必ず不幸にするらしい。」

「それだけじゃねえ！『魔術師』は人を呪い殺せるらしい。もう何人も人間が奴の呪いで……。」「途中で割って入った男も青ざめている。」

「それに、奴は自分の依頼人でさえ不幸な目に合わせる！事実、奴に依頼をした男が崖から落ちて足の骨を負ったらしい。」「話を聞いていたチョッパーの顔が段々青くなる。」

「くれぐれも、奴には近づかない方がいい。そしてこの島では、『魔術師』の名はあまり言わない方がいい。」「

男達と別れた後、ルフィ達はレミス山に着き、登る。

「ルフィ本当に大丈夫なんだろうな。」「

「何だよそいつじゃなきゃ治せないだろ。」「

「だってさっきの話聞いただろ！ルフィ達だつてきつと！」「

先程の話でチョッパーはかなり怖がっている。

「人を呪い殺せるほどの呪術師なら、ウソップ達を治す事も出来るでしょ。」「

「まっ確かにそうだな。」「

「で、でも本当に大丈夫かな。」「

ネルも少しビビっている。

「にしても濃い霧だな。しっかり道を見なきゃ迷うなこれじゃ。」「

「ゾロなら、濃い霧じゃなくても迷うけどな。」「

レミス山はふもとを少し登ってから深い霧になっていた。数メートル先も見えないくらいだ。

「ここまでの霧だと道を外しやすいな。」

ドレークもそう呟くと、ふとある事を思った。

(ひよっとして・・・)

「んっ？何だあれ？」

ルフィは、霧の中で明りを見つけた。まるでカンテラのようだ。

「行ってみるか。」

ゾロの言葉で、ルフィ達は向かう。

「これって・・・家？」

それは家の明りだった。レンガで造られた小さな家が何軒がある。

「何なんだろうここ？」

ネルがそう呟いたとき

「何者だ。」

「！！！」

突然の声。よく目を凝らすと霧の中から、黒いローブを着た集団が来る。振り向くと後ろからもだ。

「囲まれたか。」

ドレークはそう呟く。

「よそ者が来るのは久しぶりの事だ。」

「何用だ。」

「また誰かを呪おうと言うのか？」

黒いローブ達はルフィ達に問いただす。見ると、チョッパーとネルは青ざめている。

そんな中でも

「『魔術師』はどこだ！」

ルフィははつきりと言う。

「やはり、呪いに来たか。」

「ここに来る者はいつもそうだ。」

そう黒いローブの者達は口々にそういう

「違う！仲間の呪いを解いてくれ！」

それを打ち消すかの様にルフィはそういう。

「何？」

「仲間が二人のろいで苦しんでいるんだ。俺達じゃどうにも出来ないだから『魔術師』に会いに来た！頼む！あいつらを助けてくれ！」
ルフィは頭を下げる。

「.....」

しばらく沈黙が続くが

「そのような事で俺に会いに来た者は初めてだ。」

沈黙を破った者は、霧の中から現れた。周りとは違い白いフードを被った者だ。声を聞くとどうやら男のようだ。おそらく彼が魔術師なのだろう

「しかし！」

「構わない。」

黒いローブの男が言うが、白いフードの男は、カードを見ながら静止する。

「今日は、特別な者が来ると出たからな。来い。」

白いフードの男は、ルフィ達にそっくり、霧の中へと行く。

第七話 魔術師（後書き）

銀時「おいおい、大丈夫かよこの男かなりやばい噂があるな。まっ俺は別に。」

作者「銀さん。ひざが笑っているよ。……あっ！あそこに、フロンティアの方のルーチェモンフォルダウンが！」

ズザザ

作者「何やってんの？」

作者「ば、バツカ野郎。ルーチェモンなめんなよ。七大魔王だぞ、七大魔王。」

作者「ふ〜ん。まあ銀さんは置いといて感想お待ちしてます！」

第八話 薬草を求めて、魔術師の決意（前書き）

銀時「今回。かなり遅かったな。」

作者「すみません！最近いそがしかったから！」

神楽「黙れネ。お前の書くスピードは亀アルか？」

作者「うぐっ……。」

新八「ちよつと！神楽ちゃん！いくら出番が無いからってそれはないんじゃない!？」

第八話 薬草を求めて、魔術師の決意

白いフードの男、『魔術師』の後を追って来たのは、先ほどの家と同じだが、大きさは先程の家よりも小さい。扉を開けると、家のほとんどもこの部屋に使われているような部屋に入る。家具は全くと言っていいほどなく、床には、魔法陣が書かれ二つの本棚にはよくわからない本が並んでいる。全員が入れば身動きがとれないので、ゾロが外で待つことになった。

部屋の中央にウソップとバルモンを横にする。『魔術師』は胸の模様を見る。

「これは、悲相の呪いだな。」

「悲相の呪い？」

ルフィが言う。

「強力な呪術の一つだ。日に日に体を蝕み、やがて呪いを受けたものの命を奪う。」

「治せるか？」

「当然だ。しかし、解呪のために必要な薬草がない。」

「それって、どこにある？」

ルフィが強く問う。やっと仲間を救えるからだ。

「この山の山頂にある、『水月草』と言う花がある。それがあれば治せる。」

ふと、『魔術師』はカードを見る。

「しかし、この長鼻はともかく、この者が間に合うかどうか。」

バルモンの方が進行が早いと船の中でチョッパーは言っていた。

「それでも、治せるかもしれないんだろ！ だったら俺がその花を探ってくる。」

ルフィはそう言って、家を出ようとするが

「姿形も分からぬ花をどうやって探す。」

「あつ。」

スッ

『魔術師』は立ち上がり

「俺も行くろう。ここの地理には詳しい。」

「そっか。ありがとな！そういえばお前名前なんていうんだ？」

『魔術師』の動きが一瞬止まる。

「何故そのようなことを聞く？」

「だって、何て呼べばいいか、わかんねえし。俺はモンキー・D・

ルフィ。ギルド『麦わら色の瞳』のリーダーだ！」

「……。」

しばらくの沈黙の後、魔術師はフードを脱ぐ。現れたのは、金色の長髪で、額には三角形の刺青のようなものがあり、赤い目で、無表情な男の顔だ。年はまだ若く、ゾロと同じか、1、2歳程上のなぐらいだ。

「バジル・ホーキンス。それが俺の名だ。」

ルフィ達は、山頂を目指して、上る。先頭は山の地理に詳しく、『水月草』の姿を知っているホーキンスだ。ホーキンスの話によれば、レミス山はさほど高い山ではないが、霧が深いため、迷いやすい。ホーキンスと同じくこの山に住んでいる先程の黒いローブの男達でも、少しでも霧が薄い日だけしか山頂に行かないらしい。霧で迷えば、数時間は帰れず、そこで時間を取っていたら、進行が早いバルモンでは間に合わないらしい。途中では、魔物が現れる事もあったが、すぐに倒したり逃げられたりした。

「そういえばよ。」

ルフィはホーキンスに聞く。

「何だ？」

「お前らって、何でこんな霧の深い所に住んでいるんだ？」

「呪術師は、外部とはあまり交流を好まない。」

「じゃあ。あのローブの人達も？」
ネルが聞く。

「ああ。多少は呪術は使える。・・・不思議なものだ。」
「なにがだ？」

ルフィが聞く。

「普通の人間は、呪術師とは、あまり話そうともしない。それなのに、お前は話しかけてくれた。」

「別に不思議な事はないだろ？」

ルフィは言葉の意味が分からないようだ。だがネルはある事を思い出した。呪術師は呪いを操る者。そのため人々は呪術師とは、関わろうともしない。自分が呪術にかかるかも知れないからだ。もちろんそれは、誤解でそれでは、剣で斬られるかもしれないから剣士と関わらない。魔術にかかるかも知れないから魔導師とは関わらない事と一緒にある。

「勝手な事だな。」

ゾロが呟く。

「自分が、呪いにかかるのがいやだから、関わらないとか言っていて、呪いたい奴がいたら、手のひら返して頼むなんてな。」

それから、数分後ルフィ達は先に青い色がついた棒を見つけた。

「目印だ。山頂は、もう少しだな。」

ホーキンスがそう言った時。

ビュッ

「うおっ！」

ルフィに向かって大きな針が数本来た。ルフィは寸前で、避ける。長さはゾロの身長のお半分くらいだ。

「なんだ？」

その直後

ビュウ

「うわっ！」

突然の強風がルフィ達を襲った。

「うわああ！」

人獣型なら、この中で一番小さいチョッパーが飛ばされるが

フワアア

ガシッ

ロビンの生やした手により、捕まった。

「ありがとうロビン。」

「どういたしまして。それより一体。」

先程の強風のおかげか、霧が少し晴れ、攻撃をした者の姿が見える。数は二体。一体目は、茶色のトカゲを象なみに大きくして、爪は鋭く、目は黒い。尻尾には、鋭い針がある。飛ばされた針はこれなのだろう。二体目は、象よりも大きな黒い鳥のようだが、羽の一部は、黒い水晶のような形で、鋭い牙を持つ。

「こいつらが。」

ルフィ達は、拳や、武器を構える。

「しかしこのような魔物はいなかったはず。」

「考えるのは後にしろ。」

ホーキンスはある疑問を言うが、ゾロに後にしておけと言われる。
ビュウ

再び風を起こす鳥の魔物。しかも先程よりも強い。

「皆何かにつかまれ！」

ルフィはそう言って、近くの木に捕まる。ゾロとホーキンスとドレークは刀と剣を地面に突き刺し、

ネルは、自分の後ろの方に、氷の壁を作り、地面に伏せ、チョッパーは必死に地面にしがみつき、ロビンは腕と腕を連結させ、自分を止める。しかし

ビュビュッ

トカゲが、突風の中自分の針を発射する。

「うおっ！っとうわっ！」

ルフィは避けるが、突風で飛ばされるので、すぐに地面にしがみつ

く。

「厄介だ。しがみついていなけりや風に吹き飛ばされるし、動かないや針の餌食か。」

ゾロが言う。

「俺の魔術じゃ、時間かかるし針の餌食になる。」

ネルも考える。

「おっ！そうだ。」

そう言っつて、ルフィは立ち上がり

ボコッ

足を地面に沈め

「ゴムゴムのバズーカ！」

ドゴッ

ぐえっ

突然のルフィの攻撃に、鳥は避けきれず、当たってしまった。

「よしっ！」

「でも！針がまだ。」

ネルがそう言っつた直後

ビュッ

針がルフィ目掛けて発射される。

「あっ！やべ！動けねえ！」

「何やってんだお前！」

ゾロは走っつてルフィの元へと行き、針を落とす。

「わりいゾロ。」

ルフィの足は、地面から抜けた。

ダッ

ルフィとロビンとネルは鳥の方へ、ゾロとチョッパーとドレークとホーキンスはトカゲの方へと向かう。

「ルフィあれ！」

ネルが指差す方を見ると、鳥の背中にあの黒い機械が乗っていた。

「まさか、クラインが？」

ロビンが呟く。

ゴオッ

鳥は、竜巻を起こし、ルフィ達を襲う。

「はっ！」

ネルは、氷の壁を作るが、

ベキン

すぐに壊される。

「ゴムゴムのピストル！」

バサッ

ルフィが攻撃するが、鳥は、飛んで避ける。

「これならどう？」

フワッ ガシッ

ロビンは、鳥の右の羽に数本手を生やし、連結させ、動きを止める。

それにより、鳥は少しの間落下するが

ゴッ

鳥は、口から火を吐き、ルフィ達を襲う。

「くっ！」

一方

「ヘビーゴング！」

ガキン

「つうー！」

チョッパーはパンチをするが、トカゲの鱗が硬い。

「はっ！」

ズバッ

ゾロが斬るが、鱗の下は少ししか斬れてない。

「ちっ 案外かてえな。」

すると

ビシユ

再び針を発射する。

「ぐっ！」

「ゾロ！」

「大丈夫かすっただけだ！」

ゾロはかすっただけですんだが

ドスッ

「なっ！」

針は、後方にいたホーキンスに当たり、貫通する。ホーキンスは倒れこむ

「お前！」

「魔術師！」

ゾロとドレークが叫ぶが

しかし

「安心しろ。」

ホーキンスはむくりと起き上がる。体には、どこにも傷が無い

「今日俺は死なない。一体犠牲になっただか」

ズズッ

ホーキンスの腕から、藁人形が出てくる。藁人形の方には、針が貫通したような穴が空いてある。

「お前能力者だったのか。」

チヨッパーはそう呟く。

「ああ。」

「二人共、よそ見はするな！」

ドレークが二人に向かって言う。

「にしても、硬いなあの鱗。内側は、少ししか斬れねえ。」

「ああ。そうだな。」

パチッ

ゾロと会話をしながら、ドレークは腕のホックを外す。

「ならば、牙を立てるか。」

「何っ？・・・！！」

ゾロがドレークの方を見ると、変化がおきていた。青い目は爬虫類のような目になり、肌は、緑色の鱗が現れ、爪は鋭くなり、爬虫類の尾が生え、歯は鋭くなり、そしてギヤオオオオン！！

それは、人の体をしておらず、人よりも数倍大きく、トカゲよりも大きい。それは、恐竜だ。

「動物系か。」

ホーキンスが呟く。

「かつ、カッチョイイー！！」

「恐竜だ！」

ルフィとチョッパーが、目を輝かせる。

「お前ら！よそ見すんなよ！」

ゾロが、二人を叱咤する。

ドッ

恐竜となったドレークは、トカゲに向かう。

ビュン

トカゲは尻尾を振るが、避けられ

ガブツ

ドレークに噛み付かれる。今度は鱗の下も、効いている

ジャアアアア

トカゲは、叫び、ドレークに突進するが

「とりあえず、感謝する。次は俺だ。」

ゾロが迎え撃つ。

ビシュツ

少しの足止めのためか、ホーキンスは、どこからか出した釘で攻撃する。

ゾロは、三本の刀を、しまうが、白い鞘の刀に手をかける。狙いは、ドレークが傷を負わせた、背中左側の部分。

「一刀流。獅子歌歌！」

ビシュ

ゾロは、鉄をも斬れる斬撃を放つ。

ドサッ

トカゲは倒れた。ゾロは、ドレークと自分が傷を負わせた部分を見る。鱗が、剥がれた部分に、あの黒い機械が斬られていた。

シユル

ロビンは今度は、鳥の口を塞ぐ。鳥は、竜巻を起こそうとするが、

「紅蓮の槍よ、我が命に従い敵を撃て。フレイムランス！」

ドゴッ

ネルは、巨大な炎の槍で、左の翼に攻撃する。ひるんだ鳥が落ちる。

そして地面に着く前に

シユッ

「ゴムゴムのライフル！」

ドゴッ

ルフィは鳥の背中にある黒い機械を破壊する。

ドサッ

鳥は地面に倒れた。

「終わったな。」

ゾロが咳く。

「にしても、スゲエなお前！恐竜になったな！恐竜！」

「もう一回！変身してくれ！」

「えっ？」

ルフィとチョッパーは目を輝かせながら、ドレークに言う。

「二人共、今は山頂に行かないと。」

「どうやって行く？」

ホーキンスがネルに言う。

「えっ？そりゃ、さっきの道印と、道に・・・えっ？」

そう、ネルは気がついたのだ。自分達は道から外れ、そして道印が見えない事を。戦いのせいで道を外れてしまい、そして霧も元の濃い霧に戻ったのだ。

「じゃ、じゃあ！速く元の道に戻ろう！」

「ちなみに、俺も一度迷った事があってな、その時は数時間もかかった。」

さらなる、追撃に

「でも、速く。速く薬草を見つけないと。」

「これ以上、時間をかけたら。」

「・・・」

「ウソップ・・・バルモン。」

「くっ。」

戸惑うネルに、少し焦りを見せるゾロ、沈黙するロビンに、二人を思うチョッパーに、考え込むドレークそしてホーキンスは

(やはり、運命じゃ変えられぬか。)

「何やってるんだよ。お前ら。」

「えっ？」

声をする方を見るが、霧のせいでルフィの姿は見えない。しかし近くに腕のようなものが掴まれている木がある。

「お前ら！捕まっとけよ！」

「えっ？」

すると

「ゴムゴムの〜ロケット!!」

ビシユン

『ええええええ!!!?』

ゾロ達は上へと打ち上げられた。

「テメルファイ！何するんだ！」
ゾロが真っ先に言う。

「へっへっ！こう言う風にしときゃ山頂にすぐ着くだろっ？」
ついにルファイ達は霧を抜ける。その後は自由落下となるが

「麦わら。お前のやり方はめちゃくちゃだが、どうやら成功したよ
うだ。」

「えっ？」

落下しながらホーキンス指差す。そこには、霧の中で、唯一霧がか
かっている場所があった。

「頂上はこの山で唯一霧がかかっている場所だ。」

見ると頂上には、高い木がある。

「よし！しっかり捕まってる！」

ビシュ

ルファイはその木に向かって、手を伸ばす。ゾロ達はもう一方の手や
足を掴んだ。

シュツ

ルファイ達は一気に木の方に、着いた。

「ここに、花があるんだな。」

ルファイ達は花を探す。すると

「あっ！おいホーキンス！ひよっとしてこれが」

チヨッパーは、ホーキンスに、水色の花を見せる。

「ああ。『水月草』だ。」

「よっしやああ！じゃあ速く、戻ろう！」

ルファイ達は、降りようとするが、
バサツバサツ

「えっ？」

大きな羽の音のする方を見ると、あの鳥の魔物が飛んでいた。

「ちっ！まだ戦いてえのか！」

ゾロが刀を抜くが

キュル キュルキューン

鳥が鳴く。

「チヨツパー何ていつてるんだ？」

ルフィがチヨツパーに言う。

「えっと『ありがとう。あの機械を壊してくれて。』」

やはり、あの機械が操っていた。

キュルキューン

「『だからその礼として、お前らを降ろしてやる。お前らが、山を降りるより数倍速いから』って。」

「本当か！」

キュン

「『さあ。速く乗れ』」

ルフィ達は、鳥に乗る。途中でネルは自分が攻撃した部分を回復魔術で癒す。

バサツ

ルフィ達を乗せた、鳥は一気に山を降りる。

一方

集落では

「あれから、もう三時間か。」

「ホーキンス様はご無事だろうか。」

「まさか、また迷ってるとか。」

ホーキンスの帰りを待つ黒フード達。

その時

「うわああああ。」

空から誰かの声が聞こえる。

「えっ？」

黒フード達は上を見る。

「あの鳥野郎！途中で、放り投げやがって！」

「着陸する場所がなかったって言ってた！」

「でも、これって、普通だったら。」

ゾロは、鳥を怒りながら、チョッパーは驚きながら、ネルも目を見開いて、ロビンは少し微笑をして、ドレークはどうするか考え、ホーキンスは無表情で落ちてきた。

『ええええええええ!!?!?』

そしてルフィは

「ゴムゴムの風船!」

自分の体を膨らませて

ボンッ

ドササツ

地面に。しかし全員ルフィの膨らんだ体に、よって直撃は免れた。

「いたた。皆大丈夫?」

ネルは、ルフィ達を捜す。腕にはすり傷がある。

「ありがとな!鳥!」

「つたくよ。」

「ネルお前怪我をしてるのか!?」

「あの鳥。あまり高くはない所で、落としてくれたのね。」

「そうだな。」

「ふむ。『高所に注意』とはこの事か。」

全員、少し土で顔が汚れてたが、傷はない。

「何で、皆無傷なの!?!」

「えっ?だってルフィのクッションで、」

「いやいや!それでも、普通は怪我はするでしょ!」

「知らないのか?シーラインの住人は、他の国の奴と比べて、体が

丈夫なんだ。あれくらいの高さでも、普通は少し怪我をするくらい

だろ?」

ゾロが答える。

「いやいや!普通は運が良くても、大怪我でしょ!」

「お前達。戻ったぞ。」

「あ。ああ。お帰りなさいホーキンス様。」

ホーキンスが、黒フードの男達に話しかける。

数分後

ホーキンスは、取ってきた『水月草』で、薬を作り、二人に飲ませた。

「う・・・ここ、は？」

バルモンが目を覚まし。

「あれ？確か俺扉を開けたら、誰かに。」

ウソップも目を覚ます。

「ウソップ！」

ルフィはウソップに抱きつく

「うわっ！ルフィ！？」

「よかった。本当に良かった！」

「俺は、一体。」

「呪術が解かれたのよ。」

ロビンが答える。

「よかったな。麦わら。」

ドレークがそう言う。

「って！お前って確か！遺跡の！」

ウソップは後ろに下がるが、近くにホーキンスがいた。

「うおっ！」

「心配すんなよ！こいつら悪い奴じゃねえよ！」

ルフィはそう言った。

その後、ルフィ達は、家の外に行き、ゾロと合流する。

「って事は、俺とバルモンは呪術にかかったけど、こいつに助けられたと。」

ロビンから事情を聞いた。そしてルフィはホーキンスに向かって

「ありがとな！ウソップとバルモン助けてくれて。」

「俺は頼まれた事をしただけだ。」

「あの、ホーキンス。聞きたい事があるんだ。」

ネルが聞く。

「何だ？」

「ホーキンスが、色んな人を不幸にさせたのって本当？」

「ああ。依頼された。弱い者を騙すなどをした男で、必要以上の税金を市民から徴収したり、こき使ったりする貴族などを呪ったな。」
「ホーキンスはあっさりと答えた。どうやらホーキンスが呪術を使っただのは、悪人だけのようだ。」

「でも、いくら悪い人だからって。呪い殺すなんて。」
ネルが呟く。すると

「何を言っている？俺は不幸にした事はあるが、呪い殺した事は一度もない。」

「えっ？」

ホーキンスは首を傾げる。

「呪術師にとつて、人の命を奪う呪術は、禁術とされているからな。俺もそんな呪術はあまり知らないが。」

「でも、『悲相の呪い』は、」

「もし、誰かが禁術を使ったらと言う事で、禁術の解呪の方法は覚えさせられたな。」

ネルはぽかんとする。

「じゃあ。依頼人が崖から落ちたって。」

「あれはおそらく、この山の濃い霧で道を踏み外して落ちたんだろう。ついで、『魔術師』にやられたと思っただろう。」

ドレークが言う。

「じゃあ。あの話って。」

「おそらく、ホーキンスを恐れるあまり、話に尾ひれがついたのだろう。」

つまり、噂はほとんどが、誤解が生んだ物だったのだ。

その後、ルフィ達は集落を後にした。

「じゃあな！色々と助かった！」

ルフィは手を振った。

「行っちゃいましたね。」

「なんつーか。ああいう依頼人は初めてだったよな。」

「まさか呪うんじゃないかって、呪いを解く事になるとは重いませんでしたね。」

黒ローブの男達は、口々に言う。しかし、ホーキンスはその中で、近くの木箱に座り、カード占いをしていた。

「ホーキンス様？」

黒ローブの男達の一人が聞く。

「。。。」

ホーキンスは黙ったまま、カードを見る。

「やはり、か。」

「？」

スッ

突然、ホーキンスが立ち上がる。

「少しの間、この事を任せる。」

「えっ？」

「俺は、この山を降りる。」

衝撃的な一言に、戸惑う黒ローブの男達。

「ど、どうしてですか!？」

「数日前から、占いで、近々ある事が起きるといふ。それはこの島だけでなく、それ以上の事だと。」

「えっ？」

「気になるので、少しばかり外を見ていく。・・・それに。」

「それに？」

「何か想像をはるかに超える事、占いの結果が変わるかもしれない。」

「

「ど、どういう事ですか？」

ホーキンスは少し、間を置いて

「あのバルモンと呼ばれた者には、死相が出ていた。」

「！！」

「本当なら、あの男は、薬は間に合わず死んでいた。」

「じゃ、じゃあまさか！」

「ああ。あいつらは、運命を変えたのだ。」

「そんな、そんな事って。」

黒ローブの男達にとって、ホーキンスの占った結果が違う事には、驚いたが、同時に安心した。

ホーキンスは、自分や人の運命を占う事ができ、人の死相が見えるのだ。何度か変えようとしたが、帰られなかったのだ。ホーキンスはその力が原因で、生まれ育った村で、幼い頃から化け物呼ばわりされ、酷い迫害を受け村を追われ、この呪術師の集落に着いたのだ。その運命が変えられた。

「運命は変えられた。その事に興味を持ったただけだ。」

そう言つて、ホーキンスは準備のため、自分の家へと向かった。

(特別な相手・・・確かにそうだった。)

ホーキンスは心の中で思った。彼にとって外界の者は、自分を迫害した村人達、恨みや、憎しみを持って依頼しに来て、自分を恐れる依頼人達だけだった。そんな中であいつは、ルフィは、恐れもせず、に、接し、そして運命を変えた。世界には自分の想像をはるかに超える事がある。その興味の方が、ホーキンスが山を降りる事を決めた一番のことだった。

「世界、か。見てみるか。」

ホーキンスはそう呟いた。

第八話 薬草を求めて、魔術師の決意（後書き）

銀時「つーか、何だよ。体が丈夫って。」

作者「いやだって。普通に考えたら、ONE PIECEの人達って何だかんだ言って体丈夫でしょ。ホーキンスは黄猿にあんなに攻撃されたのに、回復したし、アプーも光の速さで、蹴られたのに、生きてたし、ゾロも、いつも普通だったら死ぬ攻撃でも、生きてたし、

銀時「いや、あれは色々だな、つーか良く考えたら、ゾロって悪魔の実食ってないのに、何だよあの体。ひよっとしたら、ルフィよりも、ダメージ多いのでは？」

作者「確かに。」

銀時「つーか。いつの間にか、ゾロの話になっちまったな。」

作者「そうだね。次回もお楽しみにしてください！そして感想お願
いします！」

第9話 船上の戦い（前書き）

クラント「そういえば、僕ってよく、間違えられたよね君に。」
作者「いや、本当に申し訳ありません！クラントさん！」

第9話 船上の戦い

山を降りて、ドレークと別れたルフィ達は、宿屋で一晩泊まった。その宿屋の主人は嗜好きで、ある事を言った。

「実は、この町の近くの町で、盗賊団が、いたんだが、その盗賊団のボスが突然倒れて、体には、デックイ針で貫かれたような傷があったんだ。そいつはすぐに海軍に捕まったけどな。聞く所によると、アイツ、最近あの『魔術師』が住む山に入ったんだよ。きつと『魔術師』の呪いだ」

ふと、ルフィ達はあの戦いで、針で貫かれたのに無事だったホーキンスの事を思い出す。おそらく彼の能力だろう。そしてルフィ達は知らない。ホーキンスが山を降りようとしている事を。

翌日、ルフィ達は、メリー号ではなく、他国行き連絡船に乗った。「にしても、確かナミの話じゃいつ良くなるか分からないって言うてたよな。」

ウソップが呟く。

「国境の海の天候は、変わりやすい。こういう事もあるのよ。」
「いつかメリー号で、国境の海を越えたいよな。」
ルフィが言う。

「確かに、他国行きの船代は高いし、ナミが手伝ってくれればいいけど。他に腕の良い航海士知らないし。」

ウソップが言う。

「前に断られただろ。」

ゾロが言う。

「……………」

「ははは、それにしても、どうしてキムラスカへ行こうと？」

無口なバルモンに苦笑しながら、ネルはチョッパーに声をかける。

「ごめんな、でもあんな事があったんだ。怪我や病気や毒だけじゃなく、呪術の治療法も知らないよ。もうあんな事には。」

チヨツパーが、一番今回の事に影響を受けているようだ。

「チヨツパー。」

「そういえば、ネル。お前なんでガゼル行きは、あんなに反対したんだ？」

ウソツプが聞く。最初はガゼル王国に行こうとしたが、ネルに反対されたのだ。

「あ、いや最近ガゼルって何かと物騒だし。」

「物騒？」

「確か、処刑寸前で脱獄した、凶悪犯の事ね。でも、他国に逃げているかもしれないし。」

ロビンが言う。

「ま、まあそうなんだけど。もしもって事があるかもしれないし」
(今、ガゼルに戻ればきつと。)

ネルは何とか、ごまかす。

「？」

ウソツプはその態度に疑問を抱く。

その時

「うっわあ。お前何で生きてるの？」

「お前は、油断しすぎだ。」

「!!!」

ルフィ達が、振り向くと、そこには船の縁にもたれているクラントと、黒いロングコートの下に黒い和服を着て、黒い髪で、黒いマフラーを巻き、ベルトには、二本の刀がさしてある背の高い男がいた。

「あつ！お前！」

「君とはもう会いたくなかったのに。」

「お前、いい加減その差別癖はやめろ。こちらもイラつく。」

「僕だって、君みたいな魔術も使えない野蛮なヒノモト出身の奴とペアを組むなんて屈辱だよ。」

「よし、お前そこでジツとしている、真っ二つにする。」

味方同士とは、思えない会話をする。

「おい！無視すんな！そしてお前は誰だ！」
ルフィは怒っている。

「うるさいな。君も呪うよ。」

「お前も少し黙れ。すまない名乗っていなかったな。俺は黒月紅。こくげつくれなひ
こいつと同じ組織の者だ。まずは、貴様の仲間を巻き込んでしまっ
た事を詫びる。すまなかった。」

案外、丁寧な紅だ。

「ちよつと、こんな奴ほつといてもいいだろ？」

「俺は無駄な犠牲は出さない主義だ。」

「それで、あなた達の目的は？」

ロビンが聞く。

「ああ、その男の抹殺だ。」

紅はバルモンを指差す。

「まさか、解かれるとは、思っていなかったからね。」

「……。」

スッ

バルモンは銃を取り出す。現在甲板には、ルフィ達しかいない。

「おい！今ここで、戦ったら船が」

ウソップが忠告する。

「別に、僕は君達と違って魔術が使えるから飛んで逃げるし、こん
な船どうでもいいよ。」

「お前！」

「舞えよ漆黒の風、シャドーウイング」

ビュ

黒い風の刃がルフィ達が襲うが、何とか避ける。しかし

ビュッ

紅が刀を抜き、迫るが

ガキン

「やらせねえよ。」

ゾロが止める。

「ほう。三本の刀を操るか。」

「ああ。俺は三刀流なんでね。」

「俺の知っている武人は、六本の刀を操る者がいたな。」

「そいつは、お目にかかりてえな。」

紅とゾロの鏢せり合いとなる。

「ルファイ！こいつは俺に任せろ！お前は」

「ああ！ゴムゴムのピストル！」

ドッ

クラントに向けて撃つが、避けられてしまう。一応船を壊さないようにしている。

フワー

ヒュル

ロビンが、クラントの体に手を生やすが

「邪魔。」

ドッ

自分の周りに衝撃波を出す。

「くっ！」

「その力、悪魔の実だっけ？本当に奇妙だね。」

「うるせえ！」

一方

紅とゾロの鏢競り合いは、意外な形で終わる。

ポウ

「なっ！」

突然ゾロの前に、黒い刃が現れ、ゾロ目掛けて振り降ろされる。

スッ

ゾロは、すぐに後退して避ける。

「魔術か？」

「いや、違う。俺は闇の『バサラ』の使い手だ。」

「バサラ？」

謎の言葉に首を傾げる。

「ウイングスラッシュ！」
ビュ

風の刃が、クラントを襲うが、バリアで防がれる。

「何だ。君魔術が使えるのに、何でこんな奴らといるの？」

「魔術が使えないからって、差別するのは間違ってる！」

その時

ガチャ

「おいアンタら何をやってるんだ！」

船の中にいた、船員が顔を出す。

「そろそろお終いにしろ。騒がしくなれば、余計な犠牲が増えるだ

けだ。」

「分かったよ。」

ゴッ

突然海の中から、青い体の翼竜が現れる。

「な、何だ!？」

ウソップがかなり驚いている。

「ブレス。」

クラントが指示を出すと

ゴッ

翼竜は、口から勢い良く水を吐き出す。

「うわああ!!！」

ルフィ達は、モロに当たって。多くの木箱や樽と一緒に

ドボン

海に落ちる。

「な、なな何だったんだ一体？」

船員は、目の前で起きた事が理解できていない。そしてあの二人と

翼竜は何処かへと消えていた。

それから数十分後、とある海岸で

ザバツ

ある生物が、何かを引き上げている。それは樽だ。そこには、ルフィとチョップが何かのロープで括りつけられていた。他にも、木箱につかまって気を失っているウソップ、同じくロープで木箱に括りつけられているロビン、そしてゾロとバアルモンとネル。

そしてルフィ達を引き上げたのは、青いヘルメットを被った亀のような生物だ。

「ありがとうだカメ。」

亀のような生物は、海にいる者に手を振っている。途中まで海にいる者に手伝ってもらったのだ

「さて、どうしよう。とりあえずタイキの家に運んで置くカメ。それだ。」

亀のような生物はジツとバアルモンを見つめる。

「んっ？どこだ・・・どこ？」

目を開けると、そこは、見慣れない天井だった。

「確か、俺海に落ちてそれで・・・。」

ルフィは、思い出そうとする。ルフィは辺りを見渡す。木造の質素な家だ。ルフィは、ベットで眠っていたのだ。

「おっ！ルフィ！」

声を出したのは、ウソップだ。

「ウソップ。無事だったのか!？」

「俺もだ。」

「何とかね。」

他にもゾロもロビンもネルもいた。隣にはベットがあって、まだチヨッパーとバアルモンが眠っている。

「何で俺無事なんだ？」

悪魔の実の能力者には決定的な弱点がある。悪魔の実の能力者は、海に嫌われ一生泳げなくなるのだ。

「一時的にネルが辺りを氷で固めて近くにあった樽や木箱にお前らを括っしておいたんだよ。」

「そっかありがとな。それにしてもここって。」ガチャ

突然家の扉が開く。

「あっ！目が覚めたんですね。」

入ってきたのは、茶色の髪で、ゴーグルを着けた少年だ。

「お前が助けてくれたのか？」

「いえっ、俺の仲間が、引き上げてくれたんです。」

ルフィの質問に答える少年。

「そいつには、礼を言わないとな、」

ゾロが言う。

「お前も、助けてくれたんだな。ありがとう！えっ・・・名前何て言うんだ？」

「ついでに言うところどこだ？」

ウソップも質問する。

「俺は工藤タイキ。っでここはレンス国の町エンスです。」

第9話 船上の戦い（後書き）

作者「次回は、シャウトモン達が登場します！」

銀時「にしても、お前自分のオリキャラの名前間違えるなんて」

作者「すみません。」

第十話 デジモン(前書き)

作者「もう一つの小説をずっと書いてたので、こっちの更新が遅れてしまって、すみませんでした！」

第十話 デジモン

「レンス国？」

ルフィが首を傾げる。

「人間や獣人やエルフ、それにデジモンが共に暮らす多民族国家ね。ハーフエルフを受け入れる数少ない国とも呼ばれてるわ。」

ロビンが説明する。ハーフエルフは人間とエルフとの間に生まれた種族だが、異なる種族から生まれた種族のため『穢れた種族』と呼ばれ迫害を受けている。

「でも、今は二つに別れていると言われるけどここは？」

「ここは『月部』です。それで皆さんは」

そういえば、自分達の名前を言っただ事じゃなかった事に気付いたルフィ達

「俺はルフィ！ギルド『麦わら色の瞳』のリーダーだ！」

「ゾロだ。こいつと同じギルドだ。」

「ロビンよ。よろしく」

「俺はウソップよろしくな！」

「ネルだよ。よろしく。」

「俺は、チョッパー！ルフィ達のギルドの一員じゃないけど、今は一緒にいるんだ。」

「よろしく。それでルフィさん達は何処から？」

「シーラインだ。」

「えっ！」

ルフィの言葉にタイキはかなり驚いている。

「シーラインって、じゃああの『魔の海』を越えて？」

「魔の海？」

「シーラインとの国境の海は他の国じゃそう呼ばれているんだ。越えるのが難しいって呼ばれている。」

ネルが説明する。

「確かにあの海は、素人が越えられる海じゃないしな。」

ゾロがそう呟いた直後

バン

突然、ドアが開かれる。

「タイキ！バアルモンが帰ってきたって本当か！？」
入って来たのは、体は赤く、タイキよりも、小さな体の恐竜のよう
な者だ。

「うおっ！」

ウソップとチヨッパーが驚く。

「デジモンだね。」

ネルが言う。

「ああ。紹介するよ。シャウトモンだ。」

「お前らが、チビカメモンが言っていた流されて来た奴か。シャウ
トモンだよろしくな！それで、タイキ、バアルモンは」

その時

「うっ・・・俺は。」

バアルモンが目覚めた。

「バアルモン！」

タイキが駆け寄る。

「タイ・・・キ？俺は・・・レンズに来て・・・しまったのか？」

「ああ！」

タイキが言う。

「それにしても、お前が俺達の隊から離れたって聞いた時は驚いた
ぜ！」

（俺達の隊？）

その時

「タイキ！」

外から現れたのは、オレンジと白の毛の巨大な狼の様な者で、尻尾
や頭にドリルが生えている。

「ドルルモン。」

「西の森に、アイツらが、現れた！すぐに向かうぞ！」

「分かった。あの、無理をしないでここにいて下さい。」
バンッ
勢い良く、ドアを閉める

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3804w/>

望みと信念を胸に

2011年11月23日07時56分発行